

当別文芸の会だより NO.25

H24・4/17 発行 (連絡先・河地良一 TEL23-2103)

平成 24 年度総会終了、3年次の活動が始まります

季節がめぐり、待ち焦がれた春の心地よい天気の中、4月 14 日(土)、13:30 より白樺コミセンで、3年次を迎える「当別文芸の会」の総会が開催されました。当日は同人(メンバー)24名(4月現在)のうち、18名の方が参加されました。新メンバーとして佐藤孝さん(スウェーデンヒルズ在住)が紹介されました。

総会の議長には東前寛治さんになっていただき、平成 23 年度の活動と決算報告、平成 24 年度の活動計画と予算案が審議され、承認されました。また、当別文芸(創刊号)の発刊および頒布状況と、第 2 号の編集状況についても報告があり、承認されました。

続いて平成 24 年度の世話人(代表・河地良一、副代表・大澤勉、事務局長・堀江三千代、会計・大口弘美、監査・安栄敏子、石川日出男)も決まり、いよいよ活動が始まります。

総会に引き続き、文芸交流会を開催しました

総会後の「文芸交流会」では、堀江三千代さんに「絵本の楽しさ」と題して、プレゼンテーションをお願いしました。堀江さんは、自分の子育ての時に、子どもの成長には本との出会いが大切であることに気づき、図書館の勉強をして仲間を募り、25年前に自宅の旧家を改造して「当別こども図書館」を開設。その活動をパワーポイントを使って紹介していただきました。そのきっかけは、充実した「公共の図書館」が身近にないことが問題で、子どもにとっても、大人にとっても、それは不幸なことであり、「当別文芸の会」としても、こうした共通認識は、基底に共有しなければということが話題になりました。

その後は懇親会で盛り上がりました

総会後の初めての懇親会は、スウェーデンヒルズ・ゴルフクラブのレストラン「レクサンド」を会場にして、16:00 より開催。竹原一孝さんが幹事長となり、堀江三千代さんの司会で読書会とはまた一味違った雰囲気の中で、楽しいひとときを過ごしました。終わって送迎バスに乗る時は、石狩湾に沈む夕陽が見送ってくれました。

5月の読書会は原田康子の「海を射つとき」です。

次回は5月 12 日(土) 13:30、白樺コミセンです。いよいよ春到来です。

当別文芸の会だより NO. 26

H24・5/21 発行 (連絡先・河地良一 TEL23-2103)

5月の読書会は原田康子の「海を射つとき」でした

桜の開花時期を迎えると心もなごみますが、農作業も一気に忙しくなってくる季節ですね。5月12日(土)13:30からの白樺コミセンでの読書会には、12名の同人(メンバー)が参加されました。

原田康子の短編「海を射つとき」の読後感想交流では、いつも突然ですが、今回は椛澤チツ子さんに司会進行をお願いしました。

原田康子は昭和3年(1928年)に東京で生まれますが、釧路で育ち、昭和20年(1945年)に釧路市立高女を卒業。昭和31年(1956年)に「北海文学」に連載した「挽歌」が67万部という空前のベストセラーで、一躍「挽歌ブーム」を巻き起こします。

短編「海を射つとき」は、道東の漁村を舞台にして、母と姉、弟を中心に、複雑な人間関係の中での心の葛藤、心理描写などでストーリーが展開する小説です。文体は一気に読ませるという印象が大方でしたが、内容については様々な感想が交流されました。女性と男性では多少、評価が分かれたかもしれませんが、それが、この読書会のいいところかもしれませんね。

これを機会に「挽歌」、そして、作者が年輪を重ねてから書いた「海霧」などを読んでみると、作者の意図するところや個性などがもう少し分かるかも……

6月の読書会は三浦綾子の「死の彼方までも」です

次回の読書会は6月16日(土)13:30、白樺コミセンです。三浦綾子の「死の彼方までも」(北海道文学全集・第17巻から)を取り上げますが、彼女の作品は、一昨年の「塩狩峠」に続いて2回目です。

今年の「文学散歩」は8月25日(土)、旭川市内の「井上靖文学館」「三浦綾子文学館」の見学を予定していますので、その事前学習を兼ねてもう一度、三浦綾子の作品に触れてみようという試みからです。

また、7月の読書会(7月14日)も同様に、井上靖の「おろしゃ国酔夢譚」(文庫本)を予定しています。

「当別文芸」(第2号)の発刊予定は6月21日です

B5版、240ページ、実費頒布1冊900円です。創刊号より60ページ増、金額も100円増で採算ラインを設定しましたので、同人(メンバー)の皆さん、昨年並みの希望冊数で頒布方、よろしく願いいたします。

当別文芸の会だより NO.27

H24・6/27 発行 (連絡先・河地良一 TEL23-2103)

6月の読書会は三浦綾子の「死の彼方までも」でした

田植や運動会シーズンの6月ですが、天候がいまひとつといったところだったでしょうか。それでも農作業も一息つくこの季節、6月13日(土)13:30白樺コミセンでの読書会には13名の同人(メンバー)が参加されました。

青柳文吉さんの司会進行で、それぞれ自由に感想を述べていただきました。

一昨年は三浦綾子の「塩狩峠」を取り上げましたが、やはり代表作だけあって、キリスト教の信仰に基ずく人間の生き方に奥深いものを感じましたが、今回の「死の彼方までも」は、現実の中で起こりうる人間の醜い生き方をどうするかという投げかけのような内容でした。

日常のくらしのなかで、突然、事件に巻き込まれていくような筋書きには、少し違和感もありましたが、この作品だけで三浦文学の真髄に触れることは出来ないなので、また機会をみて、みんなで語り合ってみたいものですね。

「当別文芸」(第2号)が発刊されました

待望の第2号が出来ました。A5版で246ページ。31名の方の寄稿があり、創刊号より68ページ増となりました(ちなみに実費頒布は900円です。PRもよろしく願いいたします)。地域に文芸の裾野を広げていく活動として、さらに盛り上げていきましょう。

第2号発刊記念祝賀会を企画しています

昨年の創刊号と同様、竹原一孝さんが発起人代表で、発刊祝賀会を企画しています。7月20日(金)18:00 会場は「田西会館」です。

第2号の感想と今後の展望を話題にして、楽しく語り合いたいといった内容です。詳細案内は、このたよりNO.27と一緒に同封しました。

7月の読書会は井上靖の「おろしゃ国酔夢譚」です

8月25日(土)の「文学散歩」(旭川)に合わせて、7月14日(土)13:30白樺コミセンでの読書会は、井上靖の「おろしゃ国酔夢譚」です。

18世紀後半、カムチャッカに漂流した大黒屋光太夫たちの数奇な運命を綴った井上靖の作品です。今回は文春文庫(610円)を用意しました(年会費の中から)。6月の読書会に参加出来なかったみなさんには、このたよりと一緒に同封しました。

深緑から、ようやく夏の陽ざしも感じられる季節の到来です。消エネにも気を使いながら、今年の夏を乗り切りましょう。